優秀賞

中村仲蔵と私

大阪府　齋藤　宏明

私は古典落語が大好きだ。今も時々カセットで聞いているのが、林家彦六が演じる「中村仲蔵」という芝居噺である。

歌舞伎役者の中村仲蔵は、厳しい修業の末にやっと名題に出世した。次の芝居の忠臣蔵はさぞ良い役を貰えるだろうと期待していたところ、仲蔵の役は、五段目の定九郎という冴えない端役が一役だけだった。仲蔵は落胆するが気を取り直して、苦心惨憺、工夫を重ねて、今までとは全く違う衣装演出の定九郎を舞台にかけた。

ところがこれが、観客から思うような反応がない。掛け声もかからず、仕舞いには全員が「うーん」と唸ったきり。「これは遺り損なった」と、仲蔵はこの失敗の責任をとって、即日、江戸を旅立とうとした。

ところがその直後、通り掛りの雑踏の中で、この芝居を観た人が「仲蔵の定九郎は良かった」と言っているのを、偶然耳にする。実は大失敗どころか、仲蔵の演じる定九郎は大好評。師匠からの呼び出しを受け、旅姿のまま直行した仲蔵は、師匠からも労いの言葉を貰う。芝居小屋には、翌日から仲蔵目当ての観客が押し寄せ、連日大入り満員となった。仲蔵の創出した定九郎の衣装演出は、お手本となって今に伝わっている。

この噺の中で、一番印象的な台詞がある。まだ自分の成功を知らず、失意のどん底にある仲蔵が、雑踏の中で自分を褒める言葉を聞いた時の独白である。「有難い。広い世間の中でたった一人だけ、俺の芸を良いと言ってくれる人がいた。こんな嬉しいことはない。」

失敗してしまった後は、普通、後悔や悔しさしかない。しかし、仲蔵のこの心情の吐露には、評価してくれた観客が一人いたということ以上の、万感胸に迫るものを感じる。

仲蔵は、端役でも腐らず精一杯の努力をした。前例に囚われず新しいことに挑戦する勇気と覚悟を持っていた。現代にも通じる大事な事を、中村仲蔵はいつも私に教えてくれる。